

塩野谷浩崇 『Jリーグのクラブにおけるボランティア組織のマネジメント』**【研究テーマについて】**

筆者の塩野谷さんは、少し変わった形態のボランティア組織を研究対象に選び、その組織のマネジメントを研究しています。

筆者が大宮アルディージャのボランティアスタッフとして長く現場に身を置き、その体験のなかから生まれてきた問題意識がそのまま研究テーマに結びついたことから、論文のテーマにはきわめて強い説得力が感じられます。

一般的にボランティア組織のマネジメントを考察するにあたって、私たちは独自の目的や規約、統治体制を有する一個の独立した組織を想起しますが、全てのボランティア組織がそうであるとは限りません。親組織に付属していたり、他の組織と深く相互依存していたりして、独立していないボランティア組織もあります。独立しているか否かは各々の事情によるものであって、組織の善し悪しとは何の関係ありませんが、非独立型の組織におけるミッション・ビジョンやリーダーシップはどういう現状にあり、いかにあるべきなのかという問題があります。

この論文が取り上げている Jリーグのクラブの場合、クラブ内に作られている非独立型ボランティア組織、クラブとは別に作られている独立型のボランティア組織があって、それぞれに一長一短があり、運営上の課題を抱えているということが示されています。

Jリーグのクラブにおけるボランティア組織の多種多様な形態を分類したこと自体も特筆すべき功績ですが、それぞれの運営上の課題を整理して示したという研究成果も、おそらく初めてのことでないでしょうか。

理論的なバックボーンがしっかりしていることも、この論文で高く評価できるポイントでしょう。田尾雅夫氏などの組織論を用いてボランティア組織のあり方を実証分析し、そのうえでミッション・ビジョンに基づくリーダーシップと、組織内人間関係調整の重要性を結論として導いており、理論面と実証面の両者を融合させることに成功しています。

総じて、大変完成度の高い論文といえます。

【研究方法について】

NPO やボランティア組織のマネジメントに関する文献を多く集めて読んだこともさることながら、筆者は多くの Jリーグのクラブに足を運び、関係者にインタビューを重ねています。筆者も言うように組織の実態は規模や設立経緯も含めて多種多様であり、一つの組織だけを見て議論を一般化することは危険です。多くの組織の実態を知るほどに視点は相対化され、議論の信頼性は高まると考えられます。

筆者は、タイプの異なるボランティア組織の典型例を取り上げて比較することにより、それぞれのタイプの特徴を浮かび上がらせていますが、これによって読者は多様なボランティア組織のあり方を容易に理解することが出来ると思われれます。

研究者は往々にして、自分の独りよがりな“仮説”を検証しようとして、フィルターを通して実践者から話を聞くことがあります。その結果、不幸にして現場の実践者の実感と乖離した結論を導きながら、その乖離に気づかずに、分かったつもりになって得意然としてしまうこともあるのです。机上の空論に陥ることなく、現場の皮膚感覚をどれだけ敏感に感じ取り、研究に反映できるかがこうした実証研究に強く求められることだと思います。筆者は「この研究が実際のボランティアの『現場と乖離していないか』について最も気を揉んだ」(24 ページ)とあるように、「ボランティアの意識」という現場の皮膚感覚をだいにしながら結論を導いたことが、この論文のきわめて重要なポイントでしょう。